

徳島市が刊行した項目式市史の第二編

一、五〇〇部限定出版 (三月三十一日発行)

判型 A5判 縦210mm・横148mm
表紙 布クロス装・背文字銀版押し仕上げ
写真・図版 写真七一枚・図版七五枚組込み
頒布価格 一部 四、八〇〇円(市役所渡し価格。郵送の場合は書留送料△六五〇円▽を別に申し受けます。)

監修 学習院大学名誉教授 児玉幸多
編集 徳島市史編さん室
発行 徳島市教育委員会
印刷 第一法規出版株式会社

頒布方法 ご希望の方は、徳島市徳島町城内二番地の一徳島市立図書館徳島市史編さん室においてご購入ください。書店では販売いたしません。

なお、第二巻行政編財政編、別巻地図図集を購入できなかった方のために、保有分を放出いたしますので、この際お揃えください。

近世・近代の産業経済・交通通信を史料にもとづいて書きおこした歴史書

第一編 産業経済

第一章 近世における産業経済 一 近世経済の特質 (一) 蜂須賀家政の入部と徳島 (二) 徳島城下町の形成と商人たち (三) 周辺農村の近世的編成 (四) 貞享期の城下町 (五) 産業の発達と城下町の変貌 (六) 商人たちの生活 (七) 阿波商人の特性 (八) 経済変動と町方の組織

(九) 町人金融の組織と運用 (十) 幕末の城下町

第二章 近代の産業経済

一 農業 (一) 地租改正と農地の変動 (二) 農業形態と小作争議 (三) 新田の開発 (四) 農業用水と水利組合 1 市域の農業用水 2 市域の水利組合 (五) 農産物の生産 (六) 農業団体と行政委員会 二 畜産業 (一) 畜産物 1 馬 2 牛 3 養豚 4 養鶏 5 養兔 (二) 酪農 (三) 屠場 (四) 食肉加工品の製造 三 養蚕業 四 園芸 五 水産業 (一) 漁業制度と漁業組合 (二) 漁業調整 (三) 海面漁業 (四) 内水面漁業 (五) 養殖漁業 六 製塩業 七 勸業政策と地域開発計画 八 製紙業 (九) 徳島の和紙づくり (一) 市域の製紙工場 九 綿紡績業と染織業 (一) 市域の紡績工場 (二) 阿波のしじら (三) 徳島の染織業 (四) 市域の染織工場 十 製糸業 (一) 徳島における製糸業の変遷 (二) 市域の製糸工場 (三) 製糸工女の生活 十一 度量衡製造業 十二 醸造業 十三 電気事業 十四 ガス事業 十五 製菓業 十六 木工業 (一) 木工業の変遷 (二) 振興策と指導助成 十七 商業活動 (一) 商業組織の変遷 (二) 阿波藍の盛衰 (三) 木材市場の成立と展開 (四) たばこの販売と専売への移行 (五) 魚類と青果物の流通機構 1 魚市場 2 青果市場 3 小売公設市場と私設市場 (六) 商店街の動向 (七) 物産奨励施設の設置 1 物産蒐集場 2 物産陳列場 3 商品陳列所 十八 金融 (一) 徳島における国立銀行の設立 (二) 久次米銀行の設立と破産 (三) 徳島銀行の設立と破産 (四) 阿波銀行の設立と阿波商業銀行への移行 (五) 昌栄銀行と松島藩の没落 (六) 徳島における銀行の設立と合併 (七) 無尽会社と相互銀行 (八) 信用組合と信用金庫

第二編 交通通信

第一章 交通の近代化 一 陸上交通 (一) 道路の変遷 1 城下町の道路 2 街道 3 国道の変遷 4 県道と産業道路の建設 5 郡道 6 町村道と市道 (二) 橋梁と渡船 1 橋梁 2 渡船 (三) 軽車両の変遷 (四) 自動車交通 1 民営バスの創設 2 市営バスの創設と消長 3 省営バスの計画 4 貨物輸送の変遷 5 タクシーとハイヤー 6 自動車教習所の誕生 7 ロープウェイとリフトの建設 (五) 鉄道 1 民営鉄道の敷設 2 民営鉄道の敷設計画 3 民営鉄道の国有化 4 国有鉄道の新設 5 国有鉄道の敷設計画 6 徳島駅の変遷 7 国有鉄道の利用状況 二 水上交通 (一) 河川の交通 1 水郷潤津と舟運 2 吉野川筋の舟運 3 川舟と漕(みお)筋 4 積荷と運賃 5 木竹筏とくだ流し 6 吉野川河口の舟運 7 新町川の舟運 8 浜と雁木 9 早船と巡航船 10 廃川となった寺島川 11 勝浦川と高瀬舟 12 鮎喰川と飯尾川の舟運 (二) 海上交通 1 航路の開発と盛衰 2 港湾の利用と整備 3 海難事故と救護施設 三 民間航空 (一) 徳島の民間航空路 1 堺徳島間の民間航空路開設 2 大阪小松島間の民間航空路開設 3 大阪徳島松茂間の民間航空路開設 (二) 徳島航空学校の設立 (三) 沖洲飛行場の建設

第三編 史料

一七二項目収録

第二章 通信の近代化

一 郵便制度の創設 (一) 飛脚制度の変遷 (二) 新式郵便の登場 1 徳島藩の郵便試行 2 四国郵便線路の開設 3 郵便の現業機関 4 三等郵便局制度の確立 二 電信電話の開設 三 郵便為替の創設 四 郵便貯金の創設

徳島市史

第三卷

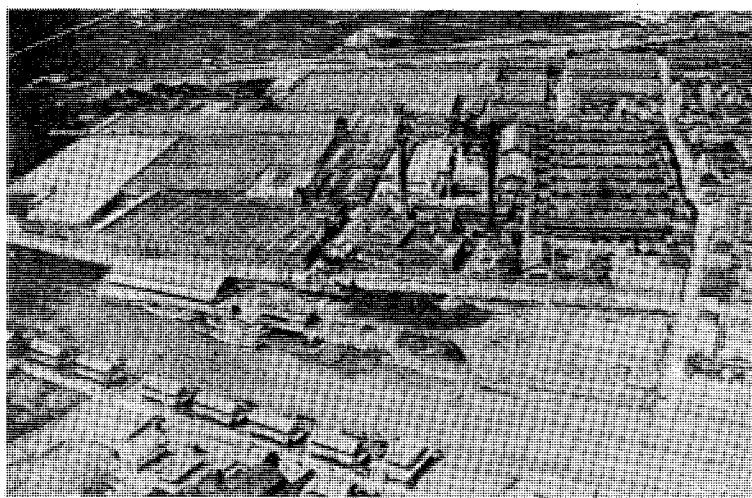
産業経済編 交通通信編

収当時の規模は明らかでないが、大正十一年には一〇万三九五〇平方呎の敷地、二万七一九九平方呎の煉瓦造と一万四一八六平方呎の木造の工場建物を有し、従業員は三七四三名（社員七三名・雇員七〇名・男工八〇〇名・女工二八〇〇名）を数える最大の工場であった。この工場を象徴するのが赤煉瓦の建物と二本の巨大な煙突であった。地上四五呎の煙突が増築されたのは大正十一年五月である。

紡機四万七七四〇錘を備えた徳島工場の綿糸生産は大正十二年には五六〇八・八ポにも達した。その後も規模拡大が続けられ、翌十三年に紡機三九六六錘、昭和五年に紡機二万四四六四錘、同十二年に撚糸機八〇〇錘、同十四年には紡機二万一三四錘が増設され、紡機は九万七五四錘を数えるに至った。昭和十三年から綿糸・綿織物・綿製品の製造・販売が規制されたので、同十五年には綿糸の生産は三九八三・八ポに減少してしまっ。この工場の原料や製品は、下の写真を

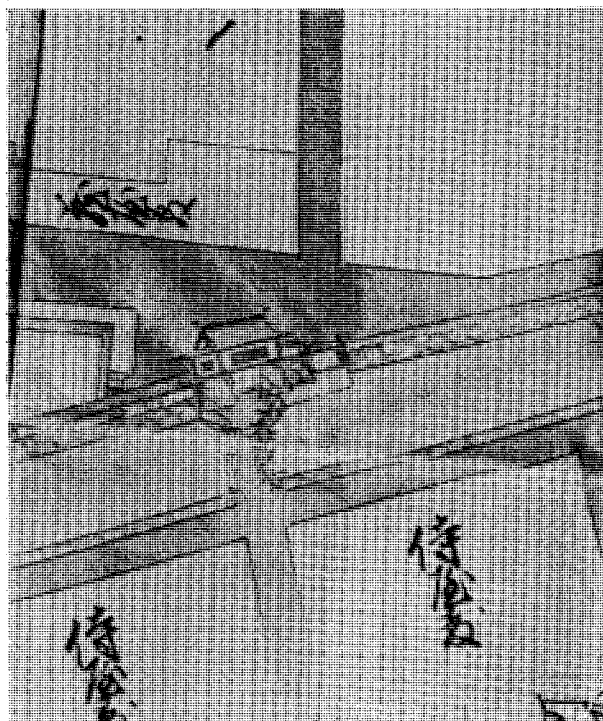
見てもわかるように助任川の専用埠頭から専属機帆船の福島丸・金福丸・三星丸などによって輸送されていた。

太平洋戦争中の企業の統合政策で昭和十八年朝日紡績と合併したとき、敷島紡績株式会社と改称したので、永年市民に



昭和15年(1940)ころの福島紡績株式会社徳島工場

一 陸上交通



延宝2年(1674)の絵図に描かれている徳島橋

この橋がいつ架けられたかは明らかでないが、徳島城の築城の際に架設されたと思われ、後此に移す」と記されているので、当初は一町程北方に架けられていたのであろう。それがいつごろ移転されたかは詳かでないが、寛永八年(一六三一)から同十三年の間に作成された「忠英様御代御山下画図」(国立史料館蔵・徳島市史別巻地図図集参照)には、既に寺島(現幸町二丁目徳島市役所前)に架設されているから、この絵図の作成以前に移転されたものであろう。橋の

構造は、修復があるので一定していないが、元禄四年六月に作成された「綱矩様御代御山下画図」(国立史料館蔵・徳島市史別巻地図図集参照)によると、橋長三四間(六一・八呎)・幅員四間(七・二七呎)、欄干に擬宝珠のついた木橋であった。上の図は、延宝二年(一六七四)に藩が幕府の老中久世広之に提出した絵図に描かれている徳島橋である。橋の架かる川は、徳島城の内堀であった寺島川であるが、今は既に埋立てられ鉄道線路・東警察署・寺島公園・徳島県青少年センター・徳島市